

京都教区時報

京都教区広報委員会
編集長 村上透磨
京都市中京区
河原町通三条上る
TEL 075-211-3468
FAX 075-211-4345
kouhou@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp> 4345

7頁 ユスト高山右近 関連略年表

点訳版「京都教区時報」〈無料〉
ご希望の方は点訳ネット「レジ
ナ」代表嶽崎(たけざき)裕子さ
んまでお申込みください。
TEL・FAX 079-431-8601

2017年 司教年頭書簡

「主こそ、わが光」

ユスト高山右近にならう 聖性への道のり

京都司教 十パウロ大塚喜直

ユスト高山右近の列福式

神のしもべユスト高山右近(以下、右近)の列福式が、2017年2月7日、大阪市(大阪城ホール)で行われます。右近の列福の恵みをいただくわたしたちは、いま、右近において、この世の救いであり、光であるキリストに出会っているのです。右近賛歌のとおり「主こそ、わが光」と、右近とともに主を賛美します。わたしは、日本カトリック司教協議会・列聖推進委員会の委員長として列福運動に携わりながら右近について多くのことを学び、右近が日本の教会への神からの恵み、賜物であることを知りました。列福式をひかえ、日本の教会が右近列福の恵みをどのように生かしていくべきかを、ご一緒に考えましょう。



高槻教会

1
2017



1. すべての人に対する聖性への招き

カトリック教会は信仰のあかしにおいて模範を示した人びとを聖人と宣言し、特別な崇敬を払ってきました。どの聖人にも、その時代と場所で示された独自の信仰のあかしと普遍的メッセージがあります。列聖の意味とは、聖人のあかしとメッセージを、いまを生きるわたしたちが模範とし、また後世の人々に伝えることにあります。列聖や列福を過去の偉人を賞賛するための報奨や叙勲のように理解されることがありますが、第二バチカン公会議は、殉教者などの聖人への崇敬



について、より霊的・司牧的な理解を示しました。教会憲章は、すべてのキリスト者に求められる聖性への召命について述べる中で（教会憲章39〜42）、教会における聖性

とは、信者の「それぞれの生き方をもって愛の完成を追求し、他の人々を育て上げる一人ひとりに対して、さまざまの形をとって現われる」（同39）ものであり、聖性に達する手段は、「神のために隣人を大切にする愛」であると教え、そのひとつのかたちである殉教は「優れた賜物、愛の最大の証明」（同42）であると説明します。

聖人とは、感嘆すべき超人でも、英雄でもありません。もし、そのように考えると、わたしたちは聖人を身近に感じる

ことなく、遠ざけていることになりません。そうではなく、神の賜物をうけて、愛の実践による聖性を身につけた人が、聖人とされるのです。聖人とは、例外的なキリスト者ではなく、普通のキリスト者のことです。聖人とは、端的にキリスト者であることです。しかし、普通のキリスト者であることが、ある時代と場所においては、きわめて非凡な生き方と映るのです。というのは、キリスト者はこの世界的な生き方に対抗して、イエスが教えた山上の垂訓（マタイ5章）の幸いを受け



高山右近
(スペイン・マンレサのイグレシオ聖洞窟教会)
Justo Ucandos (Cova de Sant Ignasi, Spain)



入れ、それを真剣に生きようとするからです。わたしたちは、聖人たちが示す模範を自分の生活でそのまま模倣するのはなく、どのような時代と背景の中での人が聖性への道しるべとなったのかを知り、そのあかしを普遍的な模範とするのです。いまわたしたちは、右近という一人の道しるべの前に立っているのです。

2. 右近とキリストの十字架

右近は、そのきわめて特徴的な生き方によって、証聖者ではなく殉教者として列福されます。右近は処刑での殉教ではなく、長期間にわたる迫害と追放のなかで継続した殉教を生きたからです。右近



高岡古城公園

が生きた16世紀から17世紀初頭は、安土桃山時代から江戸時代にかけて長く続いた戦乱がようやく収束して、国が統一に向かう時代でした。知恵と才覚のあるものは誰でも、目に見える出世と権力、名譽と繁栄が手に入るという夢をもてたのでした。右近はそのような時代に武家に生まれ、上を目指す戦国武将たちの世界で育ちました。しかし、父、飛騨守がキリスト教に入信することから、高山家の運命は時代の流れとは全く異なる次元へ向き始めました。十歳のころ、家族ともども受洗した右近は、戦国武将として成長していきしましたが、二十歳のころ、和田惟長事件（1573年）を契機に信仰に目覚め、十字架のキリストに惹かれていきます。

フランシスコ・ザビエルや当時の宣教師たちは、戦国時代の人々に、キリスト

3. 右近の苦悩と信仰の試練

の十字架をキリスト教の本質とし、キリストの受難の中に、人間に向けられた神のあわれみに満ちた愛を認識させようとなりました。そして、キリストの十字架を仰いで、神と他者のために犠牲をささげることが名譽なことであると教えられました。迫害に遭って処刑されるキリシタンたちの多くは、キリストと同じように十字架刑を望みました。右近も、キリスト教の教えによって死に対する恐怖を克服し、そればかりか迫害による苦しみと殉教さえも、信仰によって受けとめることができたのです。右近は、生まれつき意志堅固な有徳の士であったのでも、敬虔な信仰者であったのでもなく、武将として生きるがゆえの幾多の困難と葛藤の中で、悩みに悩みながら、神に信頼することを学んでいったのでした。

右近の苦悩の出発は、その死生観にあったと言えます。戦国時代では、死はまさに日常の出来事でした。殺さなければ殺される。殺すことは非道なことであることは分かっています。家族や味方を守るためには心を鬼にしなければならぬということもある。武士として生まれて



マニラ デイラオ広場

きたからには戦さを避けることはできない。そのような時代に生まれた右近は、幼いころから繊細で、争いを好まず、死を恐れたといわれます。いつ自分が殺されるかと思うと夜も眠れず、人に無残に殺されるくらいならいっそ自ら命を断とうと考えたことさえあったようです。しかし、キリシタンにそれは許されません。右近にも生きることへの執着がなかったわけではなく、死ぬことへの恐怖もあったはずですが、誰にもいえない悩みを抱いて、憂鬱な毎日を送っていた少年右近の悩みを理解してくれたのが、イエズス会修道士ロレンソ了齋でした。右近は死に対する恐怖と人を殺すことへの嫌悪をロレンソに告白しています。青年武将となった右近は、人を殺す職業についていることへの悩みが癒えるどころか



小豆島教会

いっそう深くなり、武士という境遇を自分に課せられた十字架と考えるようになりました。しかし、和田惟長の事件を境にキリストの十字架に魅せられると、いのちを軽視してこの世の権力や名誉を求める生き方から、十字架のキリストに倣い、神への愛といのちに奉仕する生き方に救いを見出し、それに自分をかけていきます。

信仰の世界では、人を神から引き離してしまふ苦しきは誘惑となり、神への信頼と人との絆を深める苦しきは試練となりません。右近は3つの大きな出来事を試練として生き抜いていきます。第一の試練は荒木村重の事件(1578年)、第二の試練は秀吉のバテレン追放

令(1587年)、そして、第三の試練が江戸幕府の禁教令(1614年)の時でした。優秀なキリシタン大名と目された右近は、織田信長や豊臣秀吉らの信頼を得て重用され、栄達を約束された道を歩むかに見えましたが、内的には信仰を土台に生きるキリストの兵士としての道を選び、神のためにいのちさえもささげる覚悟で歩み出していました。高槻から明石に改封された矢先、秀吉はバテレン追放令をもって、キリスト教に対する政策を大転換し、右近にも棄教を迫りました。右近はこれを固辞し、大名の身分を捨て、追放の身となりました。小豆島から肥後へと数年隠棲した後、加賀の国前田家に身を寄せ、結果的に26年間に能登(七尾)で過ごすことになりました。しかし、ついに徳川幕府の禁教令によって流罪となり、フィリピンに流されました。マニラでは、生きた殉教者のように大歓迎を受けましたが、高齢での過酷な船旅で身体は衰えて熱病に冒され、40日後の1615年2月3日未明、その63年の生涯を閉じました。

4. 生きながらの殉教

第一の試練となった荒木村重の事件の

ときから、右近はこの世で人に仕える生き方を捨て、いのちをかけても神に仕える生き方へと向かっていました。しかしこの時はまだ、自己奉獻の望みが神から与えられたものであることを知りませんでした。右近はいつでも殉教する覚悟をもち、また殉教を望んでもいたでしょう。しかし神は右近に、長い時間の中で殉教者になる道を用意したのでした。

第二の試練においては、右近はすべてを失っても救い主を堅固に信頼できる成熟した信仰を示し、殉教をも受け入れる霊的な力と慰めを体験しました。それでも、この時の右近の信仰は人間の能力と力に依拠したものでした。右近の深い宗教性と神への信頼には疑問の余地がないのですが、



能登 七尾 本行寺

神は誤った自信から右近を解放し、徐々に神の愛を無私のところで受け止める人に変容させることを望まれました。追放の身となった右近は、殉教



金沢教会

へのあこがれをあたためながらも、時の流れに逆らわず、自分に与えられた運命を受け入れ、神のみ旨を根気よく求めながら、神の導くまま、なお自分でできる宣教を続けました。これが右近に用意された生きながらの殉教を受け入れる道でした。

最後に右近は、殉教への積極的な望みが絶たれる第三の、そして最も辛く深い試練を受けることとなります。金沢(加賀藩)を出立した右近は、処刑によって自分のいのちを英雄的に主に捧げる殉教を予測していました。にもかかわらず、長崎からマニラへの苦しい旅を強いられ、最後の時間は、予想外のかたちで右近を決定的に真の殉教者に変えました。

5. 神のわざをあかしする苦難による殉教

殉教とは、人が自分の強さを示すことではありません。殉教という出来事は、神ご自身が弱い人間の中で働く神のわざなのです。恐ろしい拷問に耐えて死ぬことに殉教者の偉大さがあるのではなく、また現代のわたしたちがそれを顕彰するものでもありません。さらに殉教者は、犠牲者として暴力的な死の苦しみを負わされることに受け身でいるのではなく、せん。むしろ殉教者は、最期の瞬間まで神の意思に対する自由な応答を問われるのです。この応答だけが、その死を真の信仰のあかし、すなわち殉教となし得るのです。

国外追放前の9か月間、右近は処刑を覚悟し、澄み切ったところでその時を待っていました。ここで神は右近に最後の試練を与えます。流罪の地マニラは信仰を自由に生きられる土地です。右近は、神からのちを捧げることを求め続けられるものの、それは即死のかたちではなく、ただゆっくりと死へ追いやる状態にさらされるといって、継続する殉教であることを悟りました。それは、右近が自己に死ぬ旅となりました。マニラに到着したときは、もはや自分の運命が自身の手中にはなく、神の御手にあることを知りました。この自己否定の霊的な歩み

のおかげで、右近はいっそう謙遜で、神の手からすべてを受けとる受容の人になりました。右近は息を引き取るまで、神への愛のために自分のいのちを捧げたいとの望みに忠実でした。右近は、キリストのあかし人(殉教者)になりたかったし、事実そうになりました。これが、右近において成し遂げられた神のわざでした。右近の死に立ち会ったイエズス会レデスマ師の年報は、次のように締めくくられています。「右近は、(わたしたちが知っているような)血と死を通して信仰をあかしする殉教者ではありませんでした。しかし、彼が担ってきたたいへんな苦労は信仰によるものでした。右近の人

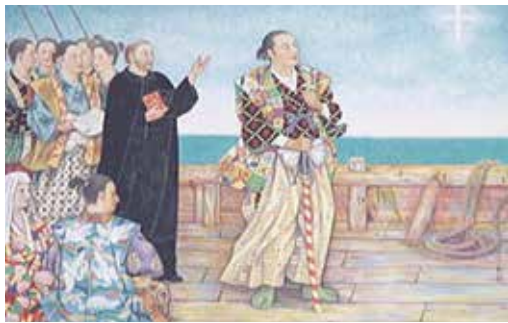


音楽と演劇で綴る右近の生涯
(やまと郡山ホール)

生は長い殉教生活でした。」

6. 右近にみるマルチルの聖性

キリスト教の歴史は、信仰をあかしする人々の歴史です。いつの時代にも迫害と殉教は起ころので、「すべての人は、キリストを人びとの前で証言し、教会にけっして欠けることのない迫害の中にあつて十字架の道を進むキリストに従う覚悟がなければならぬ」(教会憲章42)です。



右近から学ぶことは、わたしたちが神の手の中でその道具となるため、自分の力に頼る自我を捨て、あわれみに満ちた愛を注いでくださる神に自分をささげることです。信仰の世界は、自分が自分の力でこれだけのことを成し遂げたという世界ではありません。神が働いていてくださる、そこ

に自分をゆだねていく世界です。神の愛によって自己が変えられていくことに身を任せ、自分の霊的な熱意を他者への愛に向けていく、これが右近の聖性への道であり、すべてのキリスト者の召命にあてはまることです。聖性とは、自己完成を自分の手でなし遂げることではなく、ご自分に引き寄せ、ご自分に似たものにしてくださる主からの賜物なのです。これについて、パウロはこう言います。「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにししようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです」(ローマ8・29～30)。まさに右近は、その霊名のとおり、神によってキリストに似たものとして、義(ユスト)とされたのでした。

現代は相対的価値観に支配され、信念を貫いて生きることが困難な時代です。そして、さまざまなき方の選択肢を用意しながらも弱肉強食の競争社会であり、生きるために自己責任が問われ、才能や能力の有無という価値観で負け組・勝ち組を振り分けようとする時代です。



右近 マリア ガラシャ
(大阪カテドラル)

神の母聖マリア

2017年1月1日

そのような時代に生きるわたしたちは、右近を聖性への道しるべにして、どのような状況に置かれても、神への愛と他者のいのちを大切にすることを聖性への道を選び、ぶれることなく福音に従う生き方を歩み続けたいと思います。

右近は、日本の教会への神からの愛と恵みです。神は、日本の教会に右近を福音の道具として送り、右近を通して働かれ、現代のわたしたちがその恵みに与るよう、今も働き続けておられるのです。「丸血留」(マルチル)の心で現代の殉教を生きる決意を新たにしてお近の列福式をむかえ、来るべき列聖の恵みを祈り求めてまいりましょう。

ユスト高山右近 関連略年表

- 1549 (天文18) フランシスコ・ザビエル来日、キリスト教を伝える。
 52 (天文21) 彦五郎(後の右近) 摂津国三島郡清溪村高山に生まれる。
 60 (永禄3) 室町幕府、宣教師ヴィレラに畿内の宣教を許可する。
 63 (永禄6) 肥前の大村純忠、洗礼を受け最初のキリシタン大名となる。父飛驒守が洗礼を受けダリオと名のる。右近、沢城にて洗礼を受けユストと名乗る。ダリオ夫人、家臣など150人も受洗。
 68 (永禄11) 飛驒守、摂津守護和田惟政より芥川城を授けられる。
 69 (永禄12) 織田信長、ルイス・フロイスに京都宣教を許可する。
 71 (元亀2) 高山氏、高槻に移る。
 73 (元亀4) 和田惟長、高山父子暗殺を計る。飛驒守、高槻城主に。まもなく隠居して宣教に献身。右近、高槻城主となり荒木村重に属す。
 74 (天正2) 右近、摂津余野の黒田氏の娘ユスタと結婚。高槻に天主堂を建設。
 78 (天正6) 荒木村重、織田信長に謀反。右近、高槻城を開城。豊後の大友宗麟が受洗。
 79 (天正7) 村重側についていた父飛驒守、柴田勝家預けとなり北庄(福井)へ。
 80 (天正8) 安土城築城に伴い、安土セミナリオ(神学校)建設。
 81 (天正9) 巡察師ヴァリニャーノを高槻に迎え、盛大に復活祭を祝う。
 82 (天正10) 本能寺の変。右近は山崎の合戦で先陣、4千石を加増される。安土セミナリオを高槻に移す。父ダリオ、高槻に戻る。天正遣欧使節がローマへ出発。
 83 (天正11) 賤ヶ岳の合戦。秀吉方で出陣。佐久間盛政に敗北を喫す。大坂城築城にあわせ、大坂南蛮寺(教会)建設。小西行長、黒田孝高(如水)、蒲生氏郷ら受洗。
 84 (天正12) 小牧・長久手の合戦に参加。
 85 (天正13) 根来・四国平定に参加。武功を挙げ、播州明石に転封。明石教会建設。
 86 (天正14) イエズス会日本準管区長ガスパル・コエリョを伴い大坂城で秀吉に謁見。
 87 (天正15) 秀吉の九州平定に参加。秀吉のバテレン追放令により、右近の領地没収、追放。小西行長により小豆島にかくまわれる。大村純忠、大友宗麟死去。
 88 (天正16) 小西行長とともに南肥後へ。秀吉の命令で前田利家預けとなり金沢へ。利家、右近を客将とし、その保護のもと茶人として活躍。宣教活動に入る。細川忠興夫人玉子受洗。
 90 (天正18) 小田原攻めに出陣。武功を挙げる。
 91 (天正19) ヴァリニャーノら秀吉に謁見。
 92 (天正20) 秀吉、朝鮮半島侵攻(文禄の役)。
 93 (文禄2) フランシスコ会の宣教師来日。大友義統、朝鮮の役の失敗で改易。
 95 (文禄4) 父ダリオ逝去。長崎に埋葬。
 96 (慶長元) 土佐浦戸でスペイン船サン・フェリペ号事件が起こる。
 97 (慶長2) 長崎で26聖人が殉教。秀吉、2回目の朝鮮半島出兵(慶長の役)。
 98 (慶長3) 秀吉逝去。
 99 (慶長4) 前田利家逝去。右近、金沢城を修築。
 1600 (慶長5) 細川ガラシャ、人質を拒否して死す。関ヶ原の戦い。利長に従い大聖寺城を攻略。小西行長処刑。
 02 (慶長7) ドミニコ会、アウグスチノ会の宣教師来日。
 05 (慶長10) 金沢に教会建設。
 08 (慶長13) 金沢でクリスマスを行う。日本とオランダの国交が始まる。
 09 (慶長14) 利長の命で右近、高岡城を築城する。
 12 (慶長17) 岡本大八事件が起こり、家康の教会不信が高まる。
 13 (慶長18) 伊達政宗の家臣・支倉常長、ヨーロッパへ派遣される。
 14 (慶長19) 江戸幕府、キリシタン禁令を発布。右近一家、金沢を出て大坂から船で長崎へ。長崎からジャンク船でマニラへ。マニラで大歓迎を受ける。
 15 (慶長20) マニラ到着後40日ほどで熱病にかかり、2月3日帰天。マニラ市により盛大な葬儀が行われ、イエズス会聖堂に葬られる。享年63。
 2016 (平成28) 1月21日、教皇フランシスコ、右近の列福を承認。